

# 「比米」と「此米」について

——集中の鳥名の解釈をめぐる——

和田 義一

一

『萬葉集』卷十三の雑歌の部に次のような長歌（三三三九）がある。

近江之海 泊八十有 八十嶋之 嶋之埜邪伎 安利立有 花橘  
乎 末枝尔 毛知引懸 仲枝尔 伊加流我懸 下枝尔 比米乎  
懸 己之母乎 取久乎不知 己之父乎 取久乎思良尔 伊蘇  
婆比座与 伊可流我等比米登（塙書房版『萬葉集』）

ここに引用した所謂塙本の底本は西本願寺本であるがそれには「比米」が「此米」となっている。しかし、天治本や元暦校本などの古本が「比米」に作っているの、それに従って「比米」と改められたのである。そして、桜楓社版『萬葉集』・日本古典文学大系（岩

波）・日本古典文学全集（小学館）など、西本願寺本を底本とするテキストはみな同じ扱いをしている。

伊加流我（斑鳩）とともに萬葉集に詠まれているこの小鳥は卷一の左註にもその名前が出てくる。高市岡本宮御宇天皇（舒明）の代に天皇が「幸讃岐國安益郡之時」、「軍王見山作」長歌（五）の反歌（六）の左註に

山越乃 風乎時自見 寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃

右檢「日本書紀」無「幸於讃岐國」亦軍王未詳也 但山上

憶良大夫類聚歌林曰 記曰 天皇十一年己亥冬十二月己巳朔

壬午幸千伊与温湯宮、一書是時宮前在二樹木、此之二樹

斑鳩比米二鳥大集 時勅多挂稻穗而養之 乃作歌 若

疑從此便幸之歟

とある。

ところが、江戸時代の寛永版をはじめとする版本はこの「比米」を「此米」と表記し、「しめ」と訓んでいた。当時の諸註釈書の大半は「しめ」として解釈しているのである。江戸時代には本草学が流行したが、萬葉集の解釈においても本草学的知識を基盤に註釈したものが多く現われた。そして、集中の禽獸虫魚草木のみを取り出して考証し、実物と対照し、同定するという作業も行われた。鹿持雅澄の『萬葉集古義』附録の「品物解」はその集大成と言えるだろう。こうした江戸時代の註釈書の方法はかなり合理的、実証的である。江戸期の解釈を踏まえて「比米」と「此米」を再検討するのが本稿の目的である。

## 二

江戸期の註釈書に最も頻繁に引用される古辞書の一つに『倭名類聚抄』（以下「和名抄」）がある。二十巻本の元和古活字本を見ると

鵒 陸詞切韻云鵒シメ白喙鳥也

鵒 孫愔切韻云鵒シメ小青雀也

とある。『和名抄』に引用されている『漢語抄』は奈良時代成立と言われるがそれには「比米」・「之女」の区別がなされていた。それをうけて源順も区別したのである。『新撰字鏡』には和訓は記載

されていないが、漢名では区別のあるものとして扱っている。天治本の巻八鳥部第七十五三には

鵒シメ鵒シメ

鵒シメ鵒シメ

と記載されている。

しかし、この区別も『類聚名義抄』（以下「名義抄」）や『色葉字類抄』になるとかなり曖昧になってくる。前田本『色葉字類抄』（三巻本）には

鵒シメ鵒シメ

鵒シメ鵒シメ

とある。『鵒』に「ヒメ」・「シメ」二つの和訓があることを示している。これが『名義抄』ではもっとひどくなる。観智院本『名義抄』には

鵒シメ鵒シメ

鵒シメ鵒シメ

とある。（蓮成院本もほぼ同じ。）『鵒』にも「鵒」にも「ヒメ」「シメ」の和訓をあてている。このことは当時すでに「ヒメ」と「シメ」の区別がつかなくなり、しばしば混同されたことを示すものではないだろうか。観智院本、蓮成院本等改編本系『名義抄』の成立は鎌倉初期とされているが、室町期に至るとこの傾向はさらに徹底してく

る。その一例として『倭玉篇』をあげてみる。

室町中期書写とされる『拾篇目集』（国立国会図書館蔵（第三類本））には

鵲シメ 鵲シメ 鵲シメ 鵲シメ 鵲シメ 鵲シメ

と和訓を附している。これに対して、同じ室町中期書写とされる

『篇目次第』（内閣文庫蔵本影印本）には

鵲シメ 鵲シメ 鵲シメ

と和訓を附している。これには「ヒメ」の和訓が見えない。

ところで、『和名抄』で区別している「ヒメ」「シメ」はそれぞれどんな鳥なのか。「シメ」については「小青雀也」とあるので雀に似た小鳥と推測出来るが、「ヒメ」については「白喙鳥也」とあるだけで、わかりにくい。狩谷棧斎は『箋注倭名類聚抄』で「鵲」の項目の「白喙鳥也」という訓釈に関して次のように述べている。

所引文廣韻同、按爾雅釋文引字林云、鵲シメ 鵲シメ 是陸氏所本、句白必有二誤、說文作鵲、云鳥也、鵲シメ 未詳

『和名抄』の「白喙鳥也」という記述は『廣韻』にもある。ところが『爾雅（釈文）』が引用する『字林』では「鵲」を「句喙鳥」としている。そこで棧斎は「白」か「句」かどちらかが必ず誤りであるというのである。「句」は「勾」と意味が通用するから、「句喙鳥」とは「喙の曲がった鳥」ということになり「喙の白い鳥」とは異なる。

る。「鵲」について棧斎は最後に「鵲シメ 未詳」としている。

棧斎は「鵲」の「小青雀也」という記述については「廣韻同、段玉裁曰、廣韻蓋謂即竊脂、竊脂桑屬、可シメ 以充シメ 以加流賀シメ」と書いている。段玉裁は、『廣韻』には「小青雀也」とあるが、これは「竊脂」のことであるとしている。しかし、「竊脂」とは「桑屬」のことであるから「以加流賀」がこれに相当することになると棧斎は言う。「鵲」を「以加流賀」とすることについて棧斎は、やはり、納得がいかなかったらしく、「之女未詳」と最後に書いている。

しかし、棧斎は萬葉集の二例を引用して次のように述べている。『万葉集雜歌、仲枝爾伊加流賀懸、下枝爾此米乎懸、軍王歌左注、斑鳩此米二鳥大集、按此米蓋比米之譌』と。棧斎は江戸時代の版本を見ていたと思われるが、「此米」を「比米」の誤と断定している。続けて「今俗有シメ 小鳥呼シメ 之由米者其喙與シメ 以加流賀略同、是亦比米之譌之由米。」と述べている。「之由米（シユメ）」と民間で呼んでいる鳥がいる、これは喙がイカルガと似ているが、これも比米を誤ったものであると言う。そう断定する根拠が述べられていないので、棧斎の説は納得しがたいのである。

手もとの『康熙字典』を引いてみると、

鵲シメ 廣韻 句喙鳥 玉篇 鳥喙食 說文 作雉。  
雉 說文 鳥也 廣韻 白喙鳥。本作鵲。 雉

とあり、『廣韻』では「鴝—句喙鳥」、「雉—白喙鳥」と区別をしている。しかし、「鴝」と「雉」とは通用するところから、どちらがどちらとも言えないのかもしれない。「鴝」に関して、校斎の参照したのは『廣韻』の「白喙鳥」とある「雉」の方だったのかも知れない。ちなみに、改めて『説文解字注』を見ると、

鴝 瞑鴝也（鴝）从鳥旨聲。

雉 雉鳥也（雉）从隹今聲。

とある。中国では「鴝」は「小青雀」として、「竊脂」（イカルガ）とみなしてきたようである。これに対し、『和名抄』では「鴝」を「之女」とし、「鴝（伊加流加）」とは別の、しかし「イカルガ」によく似た「小青雀」として区別して来たのである。そして「雉」は中国では「句れる喙の鳥」とされてきたのである。

さて、先に述べた萬葉集の写本、天治本は識語によれば「天治元年（一一二四）六月二十五日書写」ということであり、元暦校本は「元暦元年（一一八四）六月九日以或人校合了」という識語から書写は「仁平以前元永前後（一一八一—一一五二）の寄合書」と推定されている。一方、『名義抄』観智院本には「仁治二年（一二二四）九月六日書写畢」の識語がある。『名義抄』改編本が成立したのは平安末期ないし鎌倉極初期（一一九〇ごろ）と推定されているので、天治元年より約七十年後である。『名義抄』改編本が「鴝」「鴝」両

方に「ヒメ」・「シメ」の和訓を掲載しているということと、天治本、元暦校本に「ヒメ」とあることはどう関係するのであろうか。写本が古いというだけで、「ヒメ」を絶対と見てよいのだろうか。

ところで、巻十三・三三三九番の長歌で「比米」と表記されている写本としては、右にあげた二書の外に、神宮文庫本、細井本、広瀬本などがあり、「此米」と表記しているのは西本願寺本の他に、紀州本（神田本）、陽明本、大矢本、京都大学本などがある。諸本系統図によれば、神宮文庫本、細井本は仙覚寛元本系統の本であり、西本願寺本、紀州本（巻十一以降）、陽明本、大矢本、京都大学本は仙覚文永三年本系統の本である。巻十三に関する限り、仙覚文永三年本系統のものは「此米」とあると言えよう。

これに対して、巻一（六）左注は西本願寺本が「比米」となっている。西本願寺本は巻十二を除く各巻は鎌倉時代後期書写、四人による分筆と推定されているから、筆者によって「比米」「此米」の書き分けがなされたのであろうか。紀州本の前半（巻一—十）も鎌倉時代後期書写と推定されるが、巻一は「比米」（朱で「シメ」とある。元暦校本や『類聚古集』も巻一は「比米」である。ところが、仙覚寛元本系統の神宮文庫本、細井本は「此米」である。この二書は巻十三では「比米」とあった。このちがいは西本願寺本や紀州本のように筆者の分担によるちがいとも受け取れない。『名義抄』

などに反映している「ヒメ」・「シメ」の混同の表れなのであろうか。

### 三

巻一(一六)の左注は山上憶良大夫の「類聚歌林」を引用し、さらにその中に一書が引用されている。この「一書」が何を指すか不明であるが、巻三(三三二)の山部赤人の作歌の註釈において仙覚が引用している「伊豫國風土記」の記述とも類似している個所があるので、「伊豫國風土記」もしくはその類書であろうとも言われている。この「一書」の文末は「乃作歌<sup>ミ</sup>」とあり、歌そのものは掲載されていない。しかし、赤人は「左註」に省略されたこの歌を見る機会があったのであろうか。「伊豫能高嶺乃<sup>いよのたかねの</sup> 射狭庭乃<sup>いざはらの</sup> 岡尔立而<sup>おかにたてし</sup> 敬思<sup>うしろしの</sup> 辞思<sup>ことばを</sup>為師<sup>し</sup> 三湯之上乃<sup>みゆのうへの</sup> 樹村乎見<sup>こむらむみ</sup> 臣木毛<sup>おみのも</sup> 生継尔家里<sup>おひつぎにけり</sup> 鳴鳥之音毛不<sup>なくのこゝろも</sup>更<sup>かは</sup>」という表現には前に詠まれた古歌が存在することをおうかがわせる。

仙覚は巻一(一六)の左註の「一書」を次のように註釈している。

詞是時宮前在<sup>ミコノサキニ</sup>二樹木<sup>ツキ</sup>云<sup>云々</sup>伊豫國風土記<sup>ミ</sup>二木者<sup>ミツモノ</sup>一者<sup>ヒトツキ</sup>椋木<sup>ムクノ</sup>一者<sup>ヒトツキ</sup>臣木<sup>ミキ</sup>

ト云ヘリ 臣木可尋之

先にも述べたように、仙覚は巻三(三三二)の赤人の歌の註釈においても「伊豫國風土記云」として「伊豫國風土記」の記事を引用

している。その引用文の中に巻一(一六)の歌の左注に類似の記述がある。それを同じく引用すると、

…干時於大殿戸有樞与臣木於其木集止鵠与此米鳥天皇爲此鳥枝繁穗等養賜也

とある。もし、「類聚歌林」に引用されている「一書」が「伊豫國風土記」であるとすれば、憶良の見た「風土記」と仙覚の見た「風土記」は近似しているが異なった本ということになる。

仙覚が巻三(三三二)の註釈で引用しているのと近似の記述を持つ「伊豫國風土記」がもう一つある。それは「釈日本紀卷十四(述義十)」に引用されているものである。天皇が伊豫温湯宮に幸行なされた時のことを「伊豫國風土記曰」として引用している。「天皇等於湯幸行降坐五度也」及び「立湯岡側碑文二」は同じであるが、「釈日本紀」の方はその「碑文」の文面を記述している。「仙覚抄」の方は「碑文」の文面が無くて、先にも記したように「干時於大殿戸有樞与臣木於其木集止鵠与此米鳥」と記述している。

「伊豫國風土記」と言っても、いろいろ異本があったと思われる。あるいは未定稿が出廻っていたのかもしれない。

『萬葉集註釈』の最古の写本とされる冷泉家本を引用したが、仁和寺蔵本(複製本<sup>②</sup>)を見ると巻三は「比米」とある。また江戸時代の版本は「於其集止鵠云比米鳥」とある。この版本では「鵠」

を「比米」と読み取っているのである。「鵠」は『和名抄』や『名義抄』などの古辞書では「シメ」「ヒメ」とは別のものとして扱って来た。我が国最古の本草書である『本草和名』（『輔仁本草』）も「鵠 和名伊加留加」と記している。<sup>23</sup>このように明らかに別のものとされて来た鳥名を混同する、もしくは混同させる記述をしたのは『風土記』の筆録者か、それとも『風土記』を書写した人であろう。いずれにしても本草学の知識に乏しい人たちである。

『仙覚抄』の巻一奥書には「文永六年二月二十四日記」とあるから成立は文永六年（一二六九）とされる。萬葉集の仙覚寛元本、文永三年本はそれ以前の成立である。巻一の左注にのみ限定して見ると、寛元本系統の神宮文庫本、細井本は「此米」である。そして文永三年本系統では西本願寺本を除いて、金沢文庫本、陽明本、大矢本、京都大学本（左に緒「比<sup>ヒ</sup>」とあり）などが「此米」である。つまり、巻一（六）の左注に関しては、西本願寺本を例外として、仙覚本系統の写本は「シメ」なのである。もし仁和寺蔵本の『仙覚抄』の方が原本に近いとすれば仙覚は「伊豫国風土記」を引用しながら、そこに「比米」とある記述の不確実さを彼自身が一番痛感していたかも知れない。しかもあえて、そのまま引用したことになる。

## 四

江戸時代に入ると木版の活字本が出現する。その最初のものとして「活字無訓本」（慶長古活字版）がある。これは細井本系の林道春校本によってなされたものであるが、巻一左注、巻十三ともに「比」となっている。<sup>24</sup>「活字附訓本」は「活字無訓本」を底本として、大矢本系の寂印成俊の一伝本によって校合したものをもとに刊行されたものであるが、これはともに「此」になっている。<sup>25</sup>をこれを整版に付したものが寛永二十年（一六四三）刊行の寛永版本であるが、これとともに「此」となっている。<sup>26</sup>この寛永版本（及びその版本で刊記のみを改めた宝永本）が通行本として広く出廻ることになる。江戸時代の注釈書を以下に見てみよう。

(1) 下河辺長流『萬葉集管見』（寛文初年（二六六一）頃成立か）は巻一・左注には言及せず、巻三の赤人の長歌及び巻十三の長歌に註釈をしている。

## (巻三)

なく鳥の声もかはらず一岡天皇の、皇后と、もに、此湯に幸し給ふ時、大殿の上に臣の木有。其木にあつまる鳥を、いかるか、しめといふ。天皇詔して、其木の枝に稻をかけて、かの鳥を養せ給ふと、彼國風土記に見えたり。其ことを思ひしたひて、今も鳥の聲かはらずとはよめるなり。（傍線は筆者が私に付した。以下同じ。）

(卷十三)

いそはひおるよいかるかとしめとーいハ発語ノ詞也。そばへ居るといふ心也。或云、いそふはあらそふ也。あらそひおるといふ心也云々。いかるか、しめは、ふたつの鳥なり。其かたちよく似て、つれたちありくなり。

(2) 北村季吟『萬葉拾穂抄』(貞享五年(一六八八) 四月の跋文。卷

一については註釈なし。ただし、左註一書は「是時宮ノ前ニ在ニ樹木此ニ樹班鳩比米ニ鳥大集」と記載している。

(卷十三)

いかるかしめー皆鳥名也、和名(抄)云、鵲貌似鵲而白喙者也。班鳩同齊大尾短者也。同書云、鵲小青雀也。

卷一の左註は「比米」、卷十三は「此米」としている。

(3) 契沖『萬葉集代匠記』(初稿本は貞享末年(一六八八)、精撰本は元禄三年(一六九〇)成立)。卷一左註、卷十三ともに「此米」とある。

(卷一・左注)

一書云。是ノ時ニ宮ノ前ニ在ニ樹木。此之ニ樹ニ班鳩此米ニ鳥大集。時ニ勅シテ多ク掛ニ稻穂ニ而養之、乃作歌云。

【精】一書云。此ヨリ又撰者ノ詞ナリ。伊与ノ風土記ニ云。湯郡、天皇等於湯ニ幸行シテ降坐五度也。以ニ岡本ノ天皇并ニ皇后ニ廻爲ニ一

度。于レ時於ニ大殿戸ニ有レ樅云ニ臣木ト、於其上ニ集ニ鵲云ニ比米鳥。天皇爲此鳥ニ枝繁穂等ニ養賜也。今引ルハ此風土記ニ似タリ。へサレトモ此風土記ノ文拙シテ《誤アリ》真偽知カタシ。

(卷十三)

……仲枝爾伊加流我懸下枝爾此米乎懸……伊蘇婆比座與伊加流我等此米登

【精】伊加流我懸、此米乎懸ハ、共ニ媒鳥ナリ。鵲鵲フタツノ鳥、其形能以テ打ツレアリケハ……

【初】いかるかしめふたつの鳥、其かたちよく以て、つれたちありくなり。いかるかは鵲、日本紀等皆班鳩とかけり。しめは鵲の字なり。

契沖は卷一・左註について、初稿本では「一書云」は「風土記」なるべしと述べ、精撰本では「伊与ノ風土記」を引用している。それは『仙覺抄』の版本が卷三に引用している文章と酷似している。あるいはそれからの引用かも知れない。しかし、文末に「サレトモ此風土記ノ文拙シテ『誤アリ』真偽知カタシ」と述べている。契沖が何を指して『誤アリ』と言ったのか不明であるが、「於其上ニ集ニ鵲云ニ比米鳥」もその「誤」の一つであったかもしれない。

(4) 荷田春満『萬葉集僻案抄』(享保十年(一七二五)頃の執筆)。

(巻一のみの註釈である。)

(巻一・左註)

一書曰是時宮前在二樹木此之二樹斑鳩此米二鳥大集

(釋) 斑鳩此米二鳥とは、此米を一古本に、比米に作せり。此米は鶇也。比米は鶇也。共に小鳥なれども、此米は誤なるべし。何者当集第十三卷の長歌に、花橘を、末枝にちひきかけ、中枝にいかり(い・か・り・は・い・か・る・が・の・誤・写・か?) かけ、下枝に比米をかけと、斑鳩と比米とを対句によめる歌あり。かの十三卷の長歌も、印本には此米とかけり。然れども古本比米とかけば、一証なるべし、そのうへ漢語抄に、鶇のかなを比米とかき、鶇のかなを之女とかきたれば、比米の二字には証あり。此米の二字には証なければ也。しかれば此は誤なるべし。

春満が見ていた古本は不明である。「此米は鶇也。比米は鶇也。」は春満が見ていたであろう「和名抄」の記事であろう。そして、漢語抄に「之女」とあり、流布している版本には「此米」とあつて、「此米」が「之女」である証がないのである。

(5) 賀茂眞淵『萬葉考(三三)』(明和五年(一七六八)ころ成立)。

(巻十三)

仲枝尔。伊加流我懸。推古天皇紀に、以加留我の宮の事を斑鳩とかき、和名抄に、鶇名和云斑鳩等大尾短者也、とあり  
下枝尔。此米乎懸。とす

伊加流我等此米登。これは右に引たる紀の哥とひとしきたとへ哥なり、

(6) 荒木田久老『萬葉考楓落葉』(三卷)上(天明八年(一七八八)の序)。

本書は師の真淵が萬葉集卷一・卷二の註釈に力を注ぎ、明和六年(一七六九)に刊行した後を承け、その体裁を襲つて、もっぱら巻三を註釈したものである。

(巻三)

臣木毛。生繼爾家里。風土記云、以爾本天皇並皇后二繼爲二度、下時於大庭戸有橘云云、木於其上集鶇、云云此米鳥天  
皇爲此鳥鶇也。鶇也。云々

久老は「風土記」の文章中の「比米」をも「此米」と訓んでいる。(7) 橘千蔭『萬葉集略解』(寛政十二年(一八〇〇)成立)。

(巻一・左註)

是時宮前在二樹木。此之二樹斑鳩此米二鳥大集。……風土記鶇比米と有。

(巻十三)

……下枝爾此米乎懸。……伊加流我等此米登。

(注釈) いかるが推古紀以加留我の宮を斑鳩と書。和名抄に、鶇と有り。しめ同書に、鶇小青雀也と見ゆ。この二つは枝に懸置て媒鳥とする也。

千蔭も左注の引用文を「此米」としているのである。最後に岸本由豆流の『萬葉集攷証』を挙げておく。本書は「萬葉



集』卷六までの注釈である。

(8) 岸本由豆流『萬葉集攷証(第一卷)』(文政十一年(一八二八)成立)。

### (卷一・左注)

一書云、是を代匠記には、風土記なるべしといはれしかど、風土記の文といいたくたがへり。ここにあぐるを見てしるべし。仙覚抄卷五、引伊豫國風土記云、湯郡、天皇等於湯老行五度出、以調本天皇并皇后一嬪、爲二度也、于時、於大段戸、有櫓、云臣木、於其集上櫓、云比米鳥、天皇爲此鳥、枝繁穗等養賜也云々などあるにても一書と云は風土記ならざるべし。

此米よめるにても、こは此米なる事しる。和名抄羽族名云、孫備切韻云、鷗鷗小背雀なり云々とあるこれなり。

## 五

本草学は元來中国に起こった学問であつたが、慶長十二年(一六〇七)に林羅山が李時珍の『本草綱目』(金陵本)を長崎で入手し、それに基づいて『多識篇』を書いて、その書の価値を賞揚したことにより『本草綱目』は日本で流行するようになった。寛永十四年(一六三七)に江西本の和刻(京都野田弥次右衛門版)が出てから、寛文十二年(一六七二)版、正徳四年(一七一四)稻生若水版、明の崇禎版の覆版など多くの刊本が出版され、当時の医家や儒者など

が熱心に研究した。一方で日本人自身による本草書も作られた。貝原益軒『大和本草』(宝永六年(一七〇九)刊、稻生若水『庶物類纂』(天明三年(一七八三)完成、小野蘭山『本草綱目啓蒙』(初版は享和三年(一八〇三)文化三年(一八〇六)に刊行)などがその代表的なものである。將軍吉宗の学問奨励、実学尊重、物産振興の政策路線と相まって、本草学が興隆し、本草学者らによる薬品会の開催も頻繁に行なわれた。

こうした時代的風潮の中で、萬葉集を本草学的観点から研究する学問が生まれた。萬葉集中の禽獸虫魚草木を抜き出して、考証し、実物と比定する学問である。その学問に従事した人たちは国学系統の神官・僧侶・武士・町人などであった。この人たちの学問を仮に萬葉博物学と呼んでおく。

萬葉博物学書の最も早いものが、もと彦根藩士小林義兄の『萬葉集中禽獸虫魚草木考』(文化十二年(一八一五)自序)である。同じ頃に成立したと考えられるのが越前国の薬種商伊藤多羅の『萬葉動植考』がある。その他武蔵国の僧春登の『萬葉集名物考』(文政六年(一八二三)自序)、伊勢国の神官荒木田嗣興の『萬葉品類鈔』(文政十年(一八一七)自序)や、土佐国の鹿持雅澄の『萬葉集品物解(古義附録)』(文政十年(一八二七)成立)などがある。江戸期には動植物の図譜が多く作られたこともその学問の実学的傾向を示

似タリ

している。雅澄の『萬葉集古義』附録として『萬葉集品物図』（三卷）があることもつけ加えねばなるまい。同じく図譜のあるものとしては著者不明『萬葉集草木考』（四卷）（大阪府立図書館蔵）がある。巻中の彩色画は亀井交山（文化以降、幕末頃の画人）。なお、明治以降刊行のものであるが、萬葉集に限定しない博物学書もある。

山本章夫（文政十年（一八二七）―明治三十六年（一九〇三））の『萬葉古今動植正名』（大正十五年十月刊）である。これも図譜を掲載している。

さて、これらの萬葉博物学書の殆んどが「此米」をとりあげている。「此米」について記載しているものは皆無である。それは何より「シメ」という鳥が実在したからであると思う。江戸時代は現代よりはるかに自然は豊かであり、人々は動植物に親しむ機会も多かったであろう。次に荒木田嗣興『萬葉品類鈔』（三之巻）の「此米」の項目を引用してみる。

此米筈、

和名鈔ニ孫箇切韻ニ云鵲ハ小青雀也漢語鈔ニ云之女トアリ今思フニシメニ鵲ノ字ヲ用フルハオボツカナシ サテ或時吾里近キ山里人コノ鳥ヲ捕テ籠ノ中ニカヒシヲ見ルニチヒサキ鳥ノ形ハ桑鵲ニ以テヤ、小サシ頭ハウス黄ニシテ肩ヨリ背カケテ灰黒色ニテ翼ハ黒シ腹ハウス白キモノナリ常ニ山林ニ住テ鳴聲山雀ニ

これによれば江戸時代にシメは民間で広く親しまれていた鳥であることがうかがわれる。萬葉博物学の観点からなされた注釈書の何よりの強みは、机上での文献による考証に終らず、実物を検証しながら同定したということにある。

既述のように『漢語抄』や『和名抄』に記載されている「シメ」は鎌倉・室町期の辞書類にも記載されている。そして、江戸期にはその実体が確認されている。現代の鳥類図鑑や鳥名辞典にもシメは記載されている。

シメは昭和初年代までは我々にまだまだ親しい鳥であった。巻十三の歌について動物学者の東光治は次のように述べている。「歌意では花橘を上中下の枝に分けて、上には綱を引きかけ、中程にイカルの卵をかけ、下にはシメの卵をかけたことになってゐるが、これは単に歌の調子からかう歌った迄のことであつて、事實は琵琶湖の沿岸や湖中の島々の樹木に、あちこちで綱をつけたリ、イカルやシメの卵を置いて、小鳥を捕へる状況を歌ったものである。」「シメは鳴き声も悪く、色彩も美しくはないが、わざわざ今でも卵用として飼育される位である。昔はイカルやシメは山の鳥屋の網にも随分かつたさうである。まして萬葉時代にこれ等両鳥が如何に豊富に存在したかは前記の歌によつても明かである。然し現今ではぐつとその類

が減少して終った。それに元来が臆病な鳥であるからちよつと人目に付きにくい。」と。

シメが奈良・平安の昔から今日まで実在した鳥だということは信じてよいであろう。しかし、そのことは「ヒメ」が実在しない鳥だったということにはならない。『漢語抄』や『和名抄』の記載が信用できるものならば、ヒメが実在したことも事実であろう。けれども、ヒメがどんな鳥であつたかは現在のところよくわかっていない。そして、言えることは、イカルガによく似た鳥として並置するにはシメの方がより適當だろうということである。

# 【注】

(1) 京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』

(昭和43年9月) 参照。

(2) 『漢語抄』は現伝しないが、平安時代に使われていたことは『令集解卷五職員令』の「主殿寮」に「漢語抄云。奥。母知許之。腰輿。多許之」(引用は『新訂増補国史大系令集解第一』(昭和51年10月)より)と記載されていることによって明らかである。

(3) 京都大学文学部国語国文学研究室編『新撰字鏡(増訂版)』

(昭和54年4月) 参照。

(4) 尊経閣蔵三卷本『色葉字類抄』(複製)(昭和59年5月) 参照。

(5) 正宗敦夫校訂『類聚名義抄』(昭和61年12月) 参照。

(6) 鎮國守國神社蔵『三寶類聚名義抄』(複製)(昭和61年1月) 参照。

(7) 川瀬一馬『増訂古辞書の研究』(昭和61年2月) 参照。

(8) 北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』(本文編)(平成6年3月) 参照。

(9) 中田祝夫・北恭昭著『倭玉篇研究並びに總合索引』(昭和51年3月) 参照。

(10) (1) に同じ。

(11) 渡部温『醒康熙字典』(複製版)(昭和52年11月) 参照。

(12) 漢 許慎撰(清)段玉裁注『說文解字注』(上海古籍出版社・一九八一年十月刊) 参照。

(13) 書き下し文は尾崎雄二郎編『訓読說文解字注石冊』(東海大学古典叢書)(一九八六年二月刊)による。

(14) 佐佐木信綱『萬葉集事典』(昭和49年4月) 参照。

(15) (7) に同じ。

(16) 『校本萬葉集(新增補版)』による。ただし複製本のあるものについては複製本を調査。

(17) (14) の『萬葉集事典』及び『校本萬葉集(新增補版)』

「萬葉集諸本系統の研究」参照。

(18) 『校本萬葉集一（新增補版）』「萬葉集諸本解説」参照。

(19) 土屋文明『萬葉集私注二』（新訂版）（昭和51年3月）参照。

(20) 仙覚『萬葉集註釈卷第一・卷第三』（冷泉家時雨亭叢書第三十九卷）（平成6年10月）参照。

(21) 黒板勝美編『舊国史大系第八卷』「秋日本紀卷十四述義十舒明一皇極」（前田家所藏本底本）（昭和40年4月）参照。

(22) 仁和寺藏『萬葉集註釈』（京都大学国語国文資料叢書別巻二）

（昭和56年5月）参照。

(23) 続群書類従・第三十輯下「輔仁本草」（昭和34年4月訂正三版）参照。

(24) (16) に同じ。

(25) 同右。

(26) 同右。

(27) 『萬葉集叢書第六輯』（水戸彰考館文庫の影写本を底本として翻刻したもの）（大正14年3月）参照。

(28) 北村季吟『萬葉拾穂抄』（二十巻二十冊の刊本）（関西大学図書館蔵）参照。

(29) 『契沖全集』第一巻（昭和48年1月）及び第二巻（昭和50年1月）参照。

(30) 『萬葉集叢書第二輯』（荷田春満『萬葉集解案抄』）（大正13年9月）参照。

(31) 「此」を「シ」の仮名として使った用例は『萬葉集』の「極此<sup>し</sup>」（三・三三三）、「此具礼<sup>し</sup>」（十・二三三）の他『播磨風土記』（揖保郡）の「意此川<sup>し</sup>」等がある。

(32) 続群書類従完成会編『賀茂真淵全集』第一巻（昭和52年4月）参照。

(33) 荒木田久老『萬葉考概落葉<sup>し</sup>上』（天明八年自序）（寛政十年（一七九八）刊）（静嘉堂文庫蔵）参照。

(34) 橘千蔭『萬葉集略解』（文化九年（一八一二）刊）参照。

(35) 『萬葉集叢書第五輯』（岸本由豆流『萬葉集攷証』）（大正13年12月）参照。

(36) 江戸時代の本草字研究の盛況よりは上野益三『日本博物字史』（昭和48年11月）にくわしい。

(37) 荒木田嗣興『萬葉品類鈔』（木村正辞旧蔵、東洋文庫所蔵）参照。

(38) 東光治『萬葉動物考（正編）』「いかるが及びしめ考」（昭和10年6月版の複刻版）（昭和57年5月）参照。